

【平成24年4月-12月授与分】博士學位論文内容の要旨及び審査の結果の要旨

<https://hdl.handle.net/2324/26189>

出版情報：2013-03-29. 九州大学
バージョン：
権利関係：

氏名・(本籍・国籍)	すがわら あき よし 菅原亮芳 (東京都)
学位の種類	博士 (教育学)
学位記番号	人環博乙第55号
学位授与の日付	平成24年8月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	近代日本における青年の「学び」と教育情報 —雑誌メディアとその言説の分析—
論文調査委員	(主査) 教授 新谷 恭 明 (副査) 准教授 野々村 淑 子 准教授 岡 幸 江 教授 山 口 裕 幸

論 文 内 容 の 要 旨

急速に制度的整備を遂げた近代日本の学校教育システムのもとで、特に青年たちの「学び」の意欲と志とはどのように形成され方向づけられてきたか。その歴史的過程を彼等に届けられた有力なメディア

の書誌的・内容的分析を通じて明らかにし、近代日本教育史の未拓の領域を解明したいというのが、本研究の目的である。

これまでさまざまなメディアや情報を部分的に利用した研究はあった。しかし本研究では、進学・受験・苦学・独学・進学資格獲得といった種々の行動に即応して、いかなる情報が青年たちのもとに届けられたかを総合的に確かめる一方で、その言説・情報によって、諸高等教育機関に関するイメージがいかに形成・普及され、青年の学校選択さらには職業選択がどのような影響を受けたかを明らかにした。第1章から第3章までは『進学案内書』、第4章は『苦学案内』、第5章は『受験と学生』、第6章は『受験界』を対象とする。

以上の作業を行うに当たって、筆者は2つの問いを立てた。第1は、上記したように、正規の学校での「学び」とそれに誘引する情報は如何なるものであったか。第2は、正規の学校での「学び」の世界の周辺にはその「学び」を支えるもう1つの「学び」の世界があったのではないか。

第1の問いについて進学案内書と苦学案内書とが伝えた進学情報を検討すると、著者たちは、①帝国大学を頂点とする学校序列が20世紀初頭に成立したこと、②案内書の内容は「官高私低」の構造を持った学校序列と資格制度に重点を置く情報を中心とするものへと変化したこと、③その変化は学校の実態におけるヒエラルヒーの成立と深く即応し、かつ強化するものとなったことを制度史・実態史の変化に即応しながら説いた。第2の問いについては、一方では、教育政策の反映を示すとともに、他方では学習する者の側の人生選択にとっての権利を獲得する手段を得させる情報を提供した。

次に受験雑誌『受験と学生』が伝えた進学情報の検討結果から第1への問いに対する解答は、①帝国大学を頂点とするヒエラルヒーを更に強化したこと、②進学案内書と同様に、内容的には「官高私低」の学校序列と資格制度に重点を置く情報を中心とするものであったこと、③入試の準備法、懸賞模擬試験等多彩な記事を掲載し読者との交流を図りつつ、学校の実態におけるヒエラルヒーを更に強化したことである。その説き方は制度史・実態史の変化に完全に即応するものであった。

第2の問いについては、時代に適応し得る性格の形成を絶えず促した。雑誌のこの傾向は、受験等が存在しなかったかに見える戦時下においても基本的に持続した。他方『受験界』は、①独学を前提とした多種多様な検定試験合格者の手記を大量に掲げ、自己学習、自発的学習を進めながらも、正規の中等教育機関を卒業出来なかった者が高等教育進学を志すならば前提条件たる「専検」等に合格し受験資格を得ることが先決であると伝え、②整備された学校体系、完成された学校序列に乗り遅れまいと検定試験に合格した人々の手記を通して、実態としての学校ヒエラルヒーが更に強まったことを、制度史の変化に即応しつつ説いた。第2への問いには、一方で、独学者を取り巻く検定試験制度変化や社会的環境について多様な情報を発信し、独学者の自己学習・自発的学習を学校システムとリンクさせつつ、他方で、高等諸学校受験資格を獲得するための実用的情報を多様に配信していた。

以上、取り上げた諸々のメディアは、青年の勉学の志と具体的な学校—制度としての学校—toに一定の方向性を与える有力な要因であったと同時に、日本の近代学校の構造的・機能的性格を「学ぶ」者の側から捉え直すのに基本的な示唆を与えてくれる有力な研究資料であると考えられる。また、本研究を通じて青年の志の所在と志の実現との中間にあるメディアを体系的・実証的に精査することができ、戦中期を含む通史的視野のもとに情報の推移を確かめることができた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、近代日本の学校教育システムは急速に制度的整備を果たしたのであるが、その中で青年たちの「学び」の意欲と志が形成されてきた過程を青年たちが触れていたメディアの書誌的・内容的分析を行い、進学・受験・苦学・独学・進学資格獲得といった青年たちの「学び」をめぐる諸行動に即応して届けられた情報について分析を行った。本研究で取り上げたのはいわゆる明治、大

正、昭和戦前期に刊行された多くの「進学案内書」、「苦学案内」といった進学情報メディアであり、明治後期から青年たちの受験・進学そして資格取得に関する情報を提供する「受験雑誌」の類いである。このようなメディアを仔細に分析し、その歴史的な役割を検証することでメディアが伝えた教育情報の質を分析するという試みは教育史研究においては斬新なものであり、新しい研究テーマと領域を切り拓いたとすることができる。一方で、これらメディアの提供する情報がいわゆる正規の学校教育という「学び」の世界のみならず、受験を通して学校での学習を志向する「学び」と学校での学習に替わる資格志向の「学び」を射程に入れ、昭和戦前期までの青年の「学び」の構造を解明した。このように制度史「進学案内」等及び「受験雑誌」といったメディアを史料として従来の「学校学習史」という教育史研究の枠を超えて青年の「学び」の文化を解明した点で本研究は教育史研究において斬新な領域を切り拓いた研究であると言える。

よって、本論文は博士（教育学）の学位に値するものと認める。

氏名・(本籍・国籍)	いむら おさむ 井村 修 (大分県)
学位の種類	博士 (心理学)
学位記番号	人環博乙第54号
学位授与の日付	平成24年7月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	視点取得と心の理論から見た統合失調症の認知臨床心理学的研究
論文調査委員	(主査) 教授 針塚 進 (副査) 教授 田 嶋 誠 一 准教授 遠 矢 浩 一 教授 中 村 知 靖

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、主として視点取得と心の理論から、統合失調症患者の社会的適応の問題を研究したものであり、13章からなる本文と2つのAppendixから構成されている。研究1から研究6は、自己中心性や視点変換、イメージ操作に関する研究であり、研究7から研究10は、心の理論や他者感情の理解に関する研究である。また研究11は文献レビューとメタアナリシスであり、第13章は総合考察と今後の研究課題となっている。

第1章では、本研究を開始したきっかけを述べた。統合失調症の概要を説明し、本研究の端緒となったAさんとの実験的面接について述べ、Frithの神経心理学に基盤を置く提案との関連に言及した。第2章では、カテゴリー化と保存の課題を用い、統合失調症患者の自己中心性を検討した。統合失調症患者では、知覚的攪乱要因がカテゴリー化を困難にすることを示した。また、彼らの約1/3が保存の課題で誤り、認知的情報処理障害があることを指摘した。第3章では、統合失調症患者の他者視点取得能力を検討するために、Piagetの3つ山課題を模した視点変換課題を実施した。視点変換課題は、統合失調症患者にとって難度の高い課題であることを確認した。しかし変換次元の減少や身体軸の利用で変換率の向上がみられた。これらの結果は、ワーキング・メモリーのvisuo-spatialな能力との関連から考察された。第4章では、統合失調症患者の視点取得の下位能力が検討された。トポロジカルな課題を除き、統合失調症患者群は、4つの下位能力の課題において、健常対照群より成績が低下していた。統合失調症患者の視点取得能力の低下は、主として2次元射

影能力の問題に起因すると推測された。第5章では、統合失調症患者のイメージ生成、およびイメージ操作の問題を検討した。統合失調症患者群においてのみ、視点変換課題の成績がイメージ生成、および操作の成績に関連があり、彼らの視点変換能力の低下は、主にイメージ操作の問題に起因すると考えられた。第6章では、統合失調症患者の2つの視点取得能力（知覚的視点と感情的視点）が検討された。統合失調症と一過性精神病障害の患者群は、健常対照群と比較して、2つの視点取得課題の成績が低かった。これらの患者群は、他者の感情状態をある程度推測できるが、自己の感情を統制できないため、誤反応を生ずると考えられた。第7章では、WAIS-Rの絵画完成の課題を利用して、統合失調症患者群と健常対照群の照合能力を検討した。統合失調症患者群は、絵画完成と絵画マッチングの両課題において、健常対照群より成績が低かった。しかし統合失調症患者群にとっては、絵画マッチングの方が、絵画完成より容易であることが示された。統合失調症患者は、基本的な照合能力はある程度有しているが、情報の比較や照合の過程に問題があることが明らかになった。第8章では、2つの統合失調症患者群（症状群と寛解群）と健常対照群に心の理論課題を実施した。症状群の心の理論課題の成績は、寛解群および健常群より低く、他者の心の状態を表象化する障害があることがわかった。しかし寛解群の反応は、いずれの課題においても健常群に近似していた。したがって統合失調症患者の心の理論の障害は、自閉症児のように欠損ではなく、心の理論の一時的機能不全である可能性が高いと考えられた。第9章では、心の理論課題の成績と症状（BPRS）および社会的適応（LASMI）との関連を研究した。心の理論課題が困難な統合失調症患者群は、陰性症状や総合精神病理の得点が高かった。また心の理論課題の誤答者は、LASMIの「断る」「人付き合い」で問題が見られた。さらに第10章では心の理論と症状および認知機能との関連をより詳細に検討した。視点変換課題の成績低下は陰性症状と関連があった。症状の比較的重い統合失調症患者群は、心の理論の障害があることが再度確認された。心の理論の障害は「失見当識」との間に関連があった。彼らは環境と自己との関係性の把握に問題があると推測された。第11章では、心の理論課題として、比較的認知的負荷の軽いヒント課題とコミック課題を使用した。評価尺度としてPANSSとLASMIを用い心の理論課題との関連を検討した。統合失調症患者群は健常対照群より、2つの心の理論課題の成績が低下していた。PANSSの「抽象思考困難」の得点が高い統合失調症患者群は、ヒント課題の成績がより低いことが示された。一方、LASMIの「集団活動」に問題のある統合失調症患者群は、コミック課題の成績が低くなる傾向が認められた。

以上の研究から明らかになったことをまとめると以下ようになる。

- (1) 統合失調症患者は視点変換が困難で、その原因はイメージ操作能力の低下と関連があった。
- (2) 知覚的視点変換と他者感情の推測能力は独立していた。
- (3) 統合失調症患者には他者感情や意図の推測能力の低下（心の理論の障害）があった。
- (4) 統合失調症患者の心の理論の障害はstateの可能性が高い。しかしtraitとする研究もある。
- (5) 統合失調症患者の心の理論の障害は、彼らの社会的適応問題の一部を説明した。

本研究の意義は次の3つが考えられる。第一に、統合失調症の症状や病態のメカニズムについて、彼らの有する認知障害の視点から、より明確に説明できる可能性を指摘したこと。第二は、このような認知臨床心理学的研究が、統合失調症の社会的適応能力を予測する心理検査の開発につながること。第三は、視点変換課題と心の理論課題が、統合失調症患者のSSTや心理教育において、社会的適応能力の向上の材料、すなわち認知リハビリテーションの課題として活用可能であること。

論文審査の結果の要旨

本論文は、主として視点取得と心の理論から、統合失調症患者の社会的適応の問題を実証的に研究したものである。

まず、第一に統合失調症患者認知的特徴と明らかにするため、カテゴリー化と保存の課題を用い、彼らの認知的自己中心性を検討し、統合失調症患者では、知覚的攪乱要因がカテゴリー化を困難にするなどの認知的情報処理障害があることを明らかにした。第二に、統合失調症患者の他者視点取得能力を検討するために、Piagetの3つ山課題を模した視点変換課題を用いて、統合失調症患者にとって視点変換を要する課題は難度の高い課題であるが、変換次元の減少や身体軸の利用で変換率の向上がみられたことを示した。これは、統合失調症患者が視点変換に困難性を有するものの認知条件によりその困難性が変化するというワーキング・メモリーのvisuo-spatialな能力との関連がありことを明らかにした。さらに、患者のイメージ生成、およびイメージ操作の問題を検討した結果、患者群においてのみ、視点変換課題の成績がイメージ生成と操作の成績に関連性があることを示し、彼らの視点変換能力の低下は、主にイメージ操作の問題に起因することを実証した。

第三に、統合失調症患者の視点取得の下位能力を検討し、ほとんどの下位能力において健常対照群より成績が低下していることを示した。すなわち、この統合失調症患者の視点取得能力の低下は、主として2次元射影能力の問題に起因することを明らかにした。

第四は、統合失調症患者群（症状群と寛解群）と健常対照群に心の理論課題を実施した結果、症状群の心の理論課題の成績は、寛解群および健常群より低く、他者の心の状態の表象化に障害があることが示唆された。しかし寛解群の反応は、いずれの課題においても健常群に近似していたことから、統合失調症患者の心の理論の障害は、自閉症児のように欠損ではなく、心の理論の一時的機能不全である可能性を示した。さらに、心の理論課題の成績と症状（BPRS）および社会的適応（LASMI）との関連を研究した結果、心の理論課題が困難な統合失調症患者群は、陰性症状や総合精神病理の得点が高いことを明らかにした。また、視点変換課題の成績低下は陰性症状と関連があり、症状の比較的重い統合失調症患者群は、心の理論の障害があること、心の理論の障害は「失見当識」との間に関連がることを明らかにした。

以上の実証的な方法により本論文で明らかになったことは以下のような。

- (1)統合失調症患者は視点変換が困難で、その原因はイメージ操作能力の低下と関連があった。
- (2)知覚的視点変換と他者感情の推測能力は独立していた。
- (3)統合失調症患者には他者感情や意図の推測能力の低下（心の理論の障害）があり、妄想のような陽性症との相関は明らかではなかった。むしろ陰性症状との相関が高かった。
- (4)統合失調症患者の心の理論の障害は、自閉性障害と異なりstateの可能性が高い。
- (5)統合失調症患者の心の理論の障害は、彼らの社会的適応問題の一部であることが推定できた。

すなわち、本論文は、統合失調症の有する認知障害の視点から、彼らの症状や病態のメカニズムの一端を実証的に明らかにした。また、本論文で用いられた認知臨床心理学的研究方法が、統合失調症の社会的適応能力を予測する心理検査の開発につながることを示唆した。さらには視点変換課題と心の理論課題が、統合失調症患者のSSTや心理教育などの臨床実践における社会的適応能力の向上に向けた支援方法や認知リハビリテーションの課題として活用可能であることを示した。

統合失調症者に関する実証的な臨床心理学的研究が少ないなかで、本論文はアプローチの視座と研究方法及び課題の独創性が高いだけでなく、精緻な実証的な臨床心理学的研究論文であると高く評価できる。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。

氏名・(本籍・国籍)	はら まき ゆたか 服 巻 豊 (佐賀県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	人環博乙第56号
学位授与の日付	平成24年10月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	維持透析患者の内発的な自己治癒活動支援に関する臨床心理学的研究
論文調査委員	(主査) 教授 針塚 進 (副査) 教授 田 篤 誠 一 准教授 古 賀 聡 教授 大 場 信 恵

論 文 内 容 の 要 旨

本稿では、維持透析患者固有の心理特性を検討することにより、彼らの生きていく力となる内発的な自己治癒活動を抽出し、自己治癒活動を活性化する臨床心理学的援助の可能性について明らかにすることを目的とした。維持透析患者は、病気や透析に対する否定と肯定の相反する感情の間で葛藤しているものと考えられ、心理的問題や心理的ケアのニーズを抱える場合がある(福西, 1997, 春木, 1999)。それでも彼らは、よりよく生きていこうと心理的主体活動として努力や工夫を行っている。筆者は、彼らがこの主体活動により、よりよい生活体験が得られるとき、内発的な自己治癒活動が活性化するものと定義した。維持透析患者は、病気や透析を引き受けながら生きていくその態度・体験のなかに、自らをよくするための自己治癒活動の動機づけを高く保持し、主体としての自己をより実感できる人々であると考えられた。維持透析患者の内発的な自己治癒活動を活性化する臨床心理学的援助の方法論と効果を明らかにすることは、心理的問題が不明確かつニーズが意識化されていない人々を包括する新たな援助技法としての意義を持つ。このことは、人が悩みを抱え、心理援助を求めて自発来談することを前提とした臨床心理学のさらなる発展に寄与できるものと考えられる。

第2章では、維持透析患者を対象とした質問紙調査ならびに透析中のベッドサイド面接調査を実施し、維持透析患者固有の心理と内発的な自己治癒活動との関係について検討した。その結果、維持透析患者は、質問紙調査では、因子分析によって「抑うつ・不安・緊張」と「活気」の相反する2因子の心理状態に規定されることが明らかとなった。ベッドサイド面接調査では、病気や透析に対する否定的な気持ちと同時に受け入れようとする肯定的な気持ちの相反する感情に「葛藤」し、葛藤を抱えるための主体的自己活動としての「心的構え」という心理特性を有することが明らかとなった。維持透析患者の心的構えは、継続的な面接の検討により、適応的な態度である受容的構えに移行することを明らかにした。ここに維持透析患者の心理特性と自分をよりよくする内発的な自己治癒活動との関係が示唆された。

第3章では、維持透析患者との言語面接と動作面接の経過を検討することにより、内発的な自己治癒活動を定義し、臨床心理学的援助としてのあり方について論じた。維持透析患者の言語面接ならびに動作面接においては、彼らの語る悩み方や動作課題への取り組み方に、病気や透析をひとりで受けようとする態度やこれまでの対応の仕方・生き方が含まれており、言語や動作を通じて相互のやりとりのなかでセラピストとの相互共感に至ることを示した。彼らは、悩み方や動作課題への取り組み方のフィードバックや支援を通して、自分に気づき、具体的な方法としての悩み方や取り組み方がわかり、納得することで、内発的な自己治癒活動が活性化し、主体的、能動的な悩み方や取り組み方を身につけ、自分にあった生き方を獲得していった。血管痛や肩凝りという疼痛を抱えた7名の維持透析患者に3週間の臨床動作法適用を行い、動作課題の疼痛軽減効果について検

討した。その結果、被験者は、肩凝り緩和効果を基盤として、7名全員が自宅でのセルフケアとして動作課題を実施した。このことは、彼らは、自分のからだにポジティブな実感を得て、自分に役立つと実感し、内発的な自己治癒活動が活性化したものと思われた。

第4章、総合考察では、維持透析患者は病気や透析を抱えて生きていくために葛藤を抱え、内発的な自己治癒活動を有している。自己治癒活動が活性化しないときは、主体活動が停滞し、疼痛となって表れることがある。こうした事態は慢性身体疾患患者には広く認められる。維持透析患者に対して悩み方や課題への取り組み方の援助を行うことは、透析固有の葛藤を抱えつつも、自分がわかり、具体的悩み方や取り組み方の方法を取り入れ、内発的な自己治癒活動が活性化し、体験の仕方（生き方）の変容をもたらすことを考察した。また、維持透析患者の疼痛、苦悩や困難感の体験世界を言語や動作を通して相互に理解することは、相互共感に至り、お互いが歩み寄りながら体験の仕方を変化させる変容プロセスであり、この変容プロセスが内発的な自己治癒活動の活性化プロセスであることを論じた。これまで多数の事例研究により、セラピーの効果として体験様式の変容が論じられたが、変容プロセスについて明らかにしたものではなかった。つまり、内発的な自己治癒活動支援は、維持透析患者の臨床心理学的援助、ひいては心理的ケアのニーズのないクライアントにも有用な援助技法であり、体験様式変容プロセスを解き明かす可能性を秘めている。さらに、維持透析患者への臨床心理学的援助における医療領域の医学的常識や治療文脈の共有に基づいた倫理的配慮の重要性と今後の課題を論じた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、維持透析患者固有の心理的特性を検討することにより、彼らの生きていく力となる内発的な自己治癒活動を抽出し、自己治癒活動を活性化する臨床心理学的援助の可能性を明らかにすることを目的としたものである。まず、本論文は、維持透析患者への面接調査等によって患者が病気や透析に対する否定と肯定の相反する感情の間での葛藤状態にありながらも、心理的問題や心理的ケアのニーズは潜在的であり、特別な心理的援助のないまま、よりよく生きていくために透析を受けるという厳しい現実に対して向き合っていることを明らかにした。そして、維持透析患者が主体的に活動に取り組み、よりよい生活体験が得られるとき、内発的な自己治癒活動が活性化しているものと規定した。すなわち、患者は透析を受けながら生きていくという体験のなかに、自らを良くするための自己治癒活動を活性化し、主体としての自己をより実感できる生き方に向かって行ける可能性をもっている人々であると仮定した。そこで本論は、その仮説を基に臨床心理学的支援を行い、その可能性を示し、適切な援助方法を明らかにした。

まず、実証的な研究では、維持透析患者を対象とした質問紙調査ならびに透析中のベッドサイド面接調査を実施し、維持透析患者固有の心理と内発的な自己治癒活動との関係について検討し、維持透析患者は、「抑うつ・不安・緊張」と「活気」の相反するような心理的な葛藤を持ちながら透析に向かっていることを明らかにした。また、ベッドサイド面接調査では、病気や透析に対する否定的な気持ちと他方でそれを受け入れようとする肯定的な気持ちが表現され、患者はアンビバレントな感情をもちつつ主体的自己活動としての「心的構え」という心理特性を有していることを明らかにした。この患者の心的構えは、継続的な面接の結果からみれば適応的な態度である受容的構えに移行することが示された。つまり、維持透析患者は葛藤やアンビバレントな感情といった揺れ動く心を持ちながらも自分のより良い生活体験が得られるような自己治癒活動を行っていく可能性をもつことが示唆された。

さらに、維持透析患者の心理臨的な援助の事例を通じて、特に患者に対して言語面接による心理臨床的援助と動作面接による援助における内発的な自己治癒活動の活性化に向けた方法や効果の違い

を比較し、それぞれの面接法の違いによる援助の目標と内容、さらにその効果が異なることを明らかにした。すなわち、維持透析患者との言語面接と動作面接の経過を検討することにより、彼らの悩み方と悩みの表現あるいは面接中の動作課題への取り組み方に、病気や透析をひとりで引き受けようとする態度やこれまでの対応の仕方・生き方が含まれており、いずれの面接法でも患者とセラピストとの相互のやりとりが進行する中では患者とセラピストは相互共感に至り、患者には新たな体験の在り方が生まれることが示された。

また、臨床事例研究として、血管痛や肩凝りという疼痛を抱えた7名の維持透析患者に臨床動作法適用を行い、動作法による面接の疼痛軽減効果について検討した。その結果、患者は、肩凝り緩和効果を基盤として、7名全員が自宅でのセルフケアとして動作課題に取り組み、自分のからだにポジティブな実感を得て、自分に役立つと実感できる活動に自ら取り組むという内発的な自己治癒活動が活性化することを明らかにした。

本論文を総括すると以下のものである。病気や透析に向き合って生きていくために維持透析患者は、葛藤や複雑な感情を抱えている。その維持透析患者の心理的な悩み方や様々な疼痛等への援助を行うことは、患者に対する全面的な受容を前提にしながらも、患者が自らと向き合えるように身体感や感情などの現実的な体験を持てるような課題場面において、自己の在り方に気づき、課題への取り組みとそれに伴う体験の仕方が変容するような働きかけによって、内発的な自己治癒活動が活性化し、よりよい生活体験が持てるようになることを多数の臨床事例によって明らかにした。

さらに、内発的な自己治癒活動支援は、維持透析患者のように始めは必ずしも心理的ケアのニーズが意識化されていないクライアントにも有用な援助の在り方であり、クライアントの体験様式変容プロセスを解き明かす可能性があることを臨床事例によって示唆した。

他方、維持透析患者への臨床心理学的援助における医療領域の医学的常識や治療文脈の共有に基づいた倫理的配慮の重要性と今後の課題についても考察がなされており、医療領域での医療専門職と心理臨床専門職との連携上の問題点が整理された。

本論文は医療領域でも患者の身体的心理的負担感が極めて高い維持透析患者へのアプローチの視座と研究方法及び課題の独創性が高いだけでなく、精緻な実証的方法と心理臨床的な方法とを融合した臨床心理学的研究として高く評価できる。

よって、本論文は博士（心理学）の学位に値するものと認める。